

世界の金シヤ子横丁

(仮称)

基本構想

名古屋市





[宝曆十二年改名護屋路見大図 製作年；宝曆 12 年（西曆 1762 年）]
愛知県図書館蔵

はじめに

名古屋城に一卷の絵巻が展示されている。

それは享保年間（1716～36）から元文年間（1736～41）の名古屋城下の風景を描いたもので、「享元絵巻」と呼ばれている。

様々な装束をまとった老若男女が本町通を往来する傍らで、茶店の軒先で腰を休める人、三味線の調べに合わせて舞い踊る人、あるいは宿屋で横になってくつろぐ人など、当時の風俗がいきいきと描かれている。

当時の名古屋城下は、折りしも徳川幕府が進めた質素儉約に対し、藩主の宗春が独自に芝居小屋や遊戯場などを設置、祭りや技芸を奨励したこともあり、「名古屋の繁華に京（興）が覚めた」と謡われるほどの華やかさを誇ったという。

享元絵巻の時代からおおよそ300年を経た今日、名古屋市は、人口220万人を擁する大都市に成長し、自動車、鉄道車両、航空機といった輸送機械や工作機械、電子機器など当地域のものづくりの拠点として大きな存在感を有している。

こうした名古屋のものづくりは、徳川家康が清須から那古野の地に町ぐるみの移設を行ったいわゆる「清須越」と、天下普請である名古屋城築城のために職人たちがこの地に集められたことに端を発している。

各地から集結した匠たちは、木曾の上質な木材や木曾三川の豊富な水、肥沃な濃尾平野がもたらす農産物などの資源を活用して、木製品、からくり、繊維製品、陶磁器、金属製品、加工食品など多様な産業を生みだし、今日のものづくりの礎を築いた。

また南部には、名古屋城築城以前から熱田神宮を核とする門前町が栄え、東海道の要衝である有松、鳴海宿とともに人々の往来や物流において重要な役割を担ってきた。

名古屋には、歴史の中で培われた伝統芸能や祭り、食文化などが今も脈々と息づいており、そうした尾張の歴史文化や独自の風土こそが都市魅力の源泉であるとともに、将来に継承すべき貴重な財産であると言える。

一方で、歴史的背景を伝える街並みの多くは、近代化の荒波の中で現代建築に置き換えられ、さらには太平洋戦争の戦火により貴重な文化財が失われたことで、来訪者はもとより市民の目に触れる機会さえも希薄なものとなっている。

そうした中で、これらの歴史文化を市民が再認識する場を設けることは名古屋市民としての誇りの醸成にも大きく寄与するものと考えられる。

また、尾張藩を様々な面で支えてきた木曾や三河、美濃などの周辺地域とのつながりも、名古屋の武家文化や庶民文化を語る上で欠くことのできない要素である。

世界規模での人的・経済的交流が一層進展する中、観光はもとより産業・経済など様々な分野において当地域の存在感を高める上でも、地域の個性を可視化するとともに、連携を図ることで相互間の魅力を向上させることが極めて重要である。この構想の推進は、そうした多面的・広域的な連携による歴史文化観光の拠点として、市内はもとより当地域の活性化に一石を投じることも期待される。

以上のような視座から、来訪者や市民が尾張の歴史文化の旅の基点として、また名古屋の都市魅力を再発見する契機として「世界の金シャチ横丁（仮称）」基本構想を策定するものである。

平成 25 年 3 月

名古屋市

目 次

第一章 世界の金シャチ横丁(仮称)構想の考え方.....	1
1) 背景と目的.....	1
2) 名古屋の歩み.....	2
3) 名古屋城とその周辺地区の位置づけ.....	4
4) 世界の金シャチ横丁(仮称)構想の考え方.....	6
第二章 空間づくりのイメージ.....	7
1) 事業展開の全体像.....	7
2) 個別の展開イメージ.....	8
第三章 連携・協働による事業推進.....	18
1) 計画づくりへの市民参加.....	18
2) 事業への市民・企業の参加.....	18
第四章 事業の進め方.....	20
1) 官民の適切な役割分担.....	20
2) 的確なニーズ把握とスピード感のある整備.....	21
3) 推進していく過程における留意点.....	22
第五章 構想の実現に向けて.....	23
1) スケジュール.....	23
2) 事業費等について.....	23
参考資料.....	24
1) 世界の金シャチ横丁(仮称)有識者懇談会.....	24
2) 市民への情報発信.....	26
3) 市民からの意見募集.....	27